

森安 孝夫 著

シルクロード世界史

紹介者 小川 正樹



講談社

2020年9月刊

四六判

232ページ

本体 1,650円

目次

序章 世界史を学ぶ理由

第1章 ユーラシア世界史の基本構造

第2章 騎馬遊牧民の機動力

第3章 シルクロードの世界システム論

第4章 ソグドからウイグルへ

第5章 ウイグル＝ネットワークの活況

第6章 シルクロードと日本

あとがき

参考文献

索引

歴史を正當に評価するということはどういうことか。著者はこの問いに対して真正面から全力で取り組む。歴史は、支配者・権力者がみずからの統治のために利用し、支配する側、勝利した側の視点で記述され、権力者の支配、差別や迫害が正当化されてきた。著者は歴史学には権力者の暴走を監視し、差別や迫害には学問的根拠がないことを明らかにする力があるとし、さらに歴史学はほかの人文・社会科学とは異なり時間と空間を自由に駆けめぐり、比べる力と結びつける力を十分に駆使して、現代社会のあらゆる事象を論理的に、因果関係を明らかにしながら説明できると強調する。

ところが、新しい学習指導要領で登場した「歴史総合」には古代史・中世史が含まれていない。現在に存在するものはすべて歴史的所産であり、現在はずべて過去によって説明されうるのであるが、その過去の重要な部分を新科目では取り扱わなくなってしまった。ここに著者は危機感をもつ。古代史や中世史がわからなければ、国家間や民族間の文化的違いが理解できなくなり、相互理解とその先にある平和共存は不可能になると危惧する。

そこで著者は古代史・中世史を学ぶことには意味がある、という事実を中央ユーラシアのソグド人、ウイグル人、マニ教の歴史を具体的に説明しながら1つ1つ丁寧に提示する。現在の日本を理解するためにも、直接影響を受けた朝鮮半島や中国だけではなく、中国に影響を与えた中央ユーラシアも理解する必要があると訴える。中央ユーラシアは前近代にあっては辺境地域などではなく、むしろ大農耕文明圏を結びつける大動脈の役割を果たしてきたのであり、中央ユーラシアに展開したシルクロードこそが前近代世界システムそのものであったのだから、シルクロードの終着点である日本も無縁であるはずがない、という主張には説得力がある。

権力者による歴史の恣意的な解釈を防ぎ、不当な差別や迫害に抵抗し、相互理解にもとづく市民社会を構築するためには、近現代史だけではなく、古代史・中世史までも理解することが必要、という指摘には異論はない。しかも現在の世界では、政治体制の違いに関わらず社会の分断が進行する危機的状況になっている。権力の暴走や差別・偏見の拡大を防ぐことは、歴史学や歴史教育にたずさわる教員に与えられた使命であり、それは可能であると著者は信じている。歴史学の醍醐味と著者の危機感が伝わる労作である。

(おがわ・まさき／函館ラ・サール中学校高等学校教頭)

大田 由紀夫 著

銭躍る東シナ海

——貨幣と贅沢の15～16世紀

紹介者 三森 朋恵



講談社

2021年9月刊

四六判

280ページ

本体1,800円

目次

第1章 贅沢は連鎖する——明・朝・日の経済成長

第2章 悪銭と悪布——巻き起こる通貨変動

第3章 そして「倭銀」があらわれた

第4章 活況と騒乱の東アジア——シルバー・ラッシュがもたらしたもの

おわりに——「唐物」と「夷貨」：東アジア史を動かす“モノ”

「歴史は偶然に支配されているのか、それとも必然か？」という問いが、本書冒頭で紹介される。

この問いに対し、著者はつぎのように文をつなぎこたえている。「さまざまな偶然が重なり合い、ひとつの状況なり環境なりが形成されてゆく。しかし、ひとたび出来上がった状況がある趨勢なり方向性を生み出し、多数の事物に対して規定的な作用を及ぼす。」そして、「時々の趨勢と偶発的な要因・出来事が複雑に絡みあって生成される一連の過程として歴史をとらえる必要がある。」このこたえを、15・16世紀環東シナ海を舞台に示そうと著されたのが本書である。

そもそも本書を手にしたのは、書名の語感のよさにひかれたことに加え、「銭」という語と対象年代から大航海時代の銀の動きについての内容を期待し、その理解を深めようとしたからだ。このような動機の読者に対しても、本書の叙述は十二分にこたえてくれる。アメリカ大陸産の銀をアジアへもちこんだ主体であるポルトガル人・スペイン人の動向や、香辛料売買、銀の大量流入によってヨーロッパで生じた価格革命、明代の税制である一条鞭法。これら高校の学習内容に、朝鮮や日本など各地の子細にも触れたうえで、文化的流行や軍事的攻防とからめながら、アジア世界の様相と確かな理解を読み手に提示する。また、銀や香辛料だけでなく、防寒衣料・装飾品として求められた毛皮や絹織物、香木などの多様な文物が舞い踊っていたことが各所で連ねられる。取引される品々の豊かさ、それを生み出す気候・風土、そして商品を求める人々の動きといった事象が複雑かつ豊かに展開される様に、読書の楽しみを実感できる。同時に、本書の目的が果たされている証拠でもある。

アメリカ大陸産の銀が中国に流入する前に銀不足が生じていた背景や、スペインにおける銀保有量と銀価格の相関の解釈についての項も興味深い。とくに後者の、銀の大量流通にともなって銀の国際統一価格が適用される状況の発生については、現代史や公民分野と連携した授業構成の可能性を感じた。そのほか、需要が供給を産むか(あるいはその逆か)といった経済的考察、朝貢・密貿易・略奪など交易の形態の諸相とその背景の関係など、視点やテーマ、問いの立て方についても示唆が得られる。陶磁器の出土状況や派遣された琉球船、^{ネリゼに}撰銭発布といったデータ・グラフなど資料も豊富で、世界史はもちろん、歴史総合の教材研究の書としても頼れる存在である。

(みつもり・ともえ／秋田県立大館鳳鳴高等学校教諭)

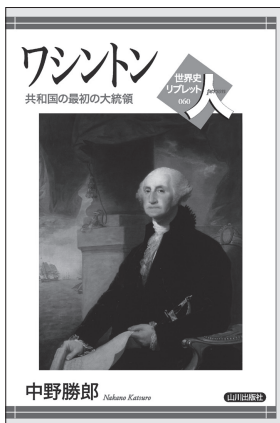
中野 勝郎 著

世界史リブレット人60

ワシントン

——共和国の最初の大統領

紹介者 美那川 雄一



山川出版社

2022年8月刊

A5変形判

96ページ

本体800円

目次

ワシントンって、だれ？

- ①ヴァージニア人、イギリス人、アメリカ人
- ②フィラデルフィア会議
- ③大統領制
- ④大統領ワシントン

アメリカ大統領といえば、一国家の元首であるだけでなく世界中に大きな影響力をおよぼす人物である。「つぎのアメリカ大統領は誰か？」という関心は、合衆国の国民だけでなく、世界中の人々を巻き込む。たしかに、21世紀に入り冷戦期ほどの影響力は失われたかもしれないが、それでもなお、アメリカ大統領は別格である。その初代大統領は、なぜ、ジョージ＝ワシントンであったのだろうか？

著者はワシントンはカリスマをもつ英雄でもなければ、卓越した軍事的能力もなかったと評価する。ワシントンが有していたのは「徳(virtue)」という、古代共和政ローマで必要とされた資質であった。というのも、イギリスに反旗をひるがえして以降、13植民地の人々は「共和政ローマ」をモデルとした新しい国づくりを構想していたからだ。アメリカの人々がもっともこだわったのは「共和政」であり、そのためにはvirtueを備えたワシントンという人物がこの国の新しい「執政官」として最適だったというのである。本書はワシントンという人物に焦点を当てながら、アメリカ合衆国建国の政治思想について「共和政」という概念で明解に語る。

「歴史総合」や「世界史探究」では、「概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力」をやしなうことが求められている。「共和政」という概念を用いて、アメリカ合衆国の歴史を考察してみると、はたしてどのくらいアメリカ合衆国は「共和政」といえるのだろうか？1960年代のアメリカは「共和政」だったのだろうか？トランプ大統領がいた合衆国は「共和政」だったのか？生徒とともに考えていく授業も面白そうである。そもそも、「共和政」は人類にとっての最高の政治形態なのか？

アメリカ大統領に求められる条件が、政治的・軍事的能力ではなく(もちろん不動産事業による経済力でもなく!)「徳」だとすれば、その理念は失われてしまったように思える。ワシントンが語ったとされる格言「正直はつねに最善の策である」や「桜の木と正直者」としての話が、なぜワシントンについて語るときについてまわるのか、本書を通じて、その理由を理解できた。ワシントンのような人物が、アメリカ大統領になる日が再びくるのか、その時地球世界の課題は解決されるのか、探究が広がる1冊となるであろう。

(みながわ・ゆういち／静岡県立小山高等学校教諭)

ドミニク・ゲッパート 著
進藤 修一・爲政 雅代 訳

ドイツ人が語る

ドイツ現代史

——アデナウアーからメルケル、シュルツまで

紹介者 角田 展子



ミネルヴァ書房

2023年5月刊

四六判

192ページ

本体2,800円

目次

はしがき

略語一覧

第1章 新たな出発と復興——1945～58年

第2章 改革と反乱——1958～73年

第3章 脅かされる安全——1973～85年

第4章 転換と固執——1985～99年

第5章 ベルリン共和国への出発——1999～2008年

第6章 グローバル化とその限界——2008～21年

参考文献

日本語版へのあとがき

訳者あとがき

関連年表

本書は、第二次世界大戦後から現代までのドイツ連邦共和国の通史である。戦後ドイツ80年の歩みについて、ドイツの国内政治を中心に、経済や文化についてもくまなく照射していく。ドイツの外交政策についても紙幅は割かれているが、冷戦構造についての解説はかなり後景に退き、欧州統合の視点からの叙述が多い。

一読して、気づくのは、日本の高校現代史教育で重点をおかれるブラント首相の東方外交や、ヴァイツゼッカー大統領の演説についての記述があっさりしていることだ。ブラントをことさら英雄視するわけではなく、彼の外交政策は、国内政治におけるSPDとCDU/CSUの対立構図のなかでかろうじて(シュタージの暗躍も含めて)実現したことが淡々と記される。ヴァイツゼッカーの演説についても「加害者をうやむやにしまった」と、賛辞一辺倒ではない評価をくだす。1980年代後半に西ドイツの学術界で巻き起こった歴史家論争については、「学術的には非生産的だった」というのが著者の結論である。

一方で、1960年代後半の学生運動がドイツ政治に与えた影響を分析し、ドイツが自由主義的で多文化的な国家として発展するきっかけは、ブラント時代であったとする歴史観を紹介している。また、東西ドイツ統一についても、その実現の過程よりはむしろ、統一後ベルリンに首都が移転し、「ベルリン共和国」という認識が生まれたこと、それに伴って国際政治上でのドイツのプレゼンスが変化したこと、シュレーダー首相がどう対応したか、そして、東ドイツ社会が統一後、どのように変容したのかなどに叙述の力点がおかれている。なかでも、旧東ドイツのエリートが統一後、どのように処遇されたかを、第三帝国崩壊後のナチ党同調者のそれと比較した分析が興味深かった。シュレーダーの経済政策についても詳細に言及され、シュレーダー時代の構造改革が2010年代以降のドイツ経済の再興を準備したという指摘は、彼我の差を感じさせずにはいられない。一方、メルケル首相の政治手法については「世論の反応に追従する政治」と辛辣である。

本書には、2022年5月付の「日本語版へのあとがき」が巻末に付記されている。ロシアによるウクライナ侵攻を機に、ドイツの外交・安全保障政策が大きく転換していくなかで、外交史の専門家である著者が現在の国際状況をどのようにとらえているのか、このあとがきだけでも一読に値する。

(つのだ・ひろこ／東京都立青山高等学校教諭)